

毎日歌壇

加藤 治郎 選

その棚に無ければ無いと告げられて小さい秋
が見つけられない 東京 石川 真琴

△評▽「ちいさい秋みつけた」という童謡
を踏まえている。食料品の棚だろうか。ド
ライな対応に昭和の情緒を想起したのだ。

呼び鈴を鳴らす 知らないおうちから会いた
い人がみんな出てくる 大津市 世田 夏雪

△評▽うれしい気持ちがあふれている。詩
歌は夢なのだという短歌観が感じられる。

くたびれてなんだか泣いてしまったなビニ
ー 袋も空を飛ぶのに 西宮市 藤平 伶

鳩時計作成キット本があり創刊号にうずくま
る鳩 枚方市 久保 哲也

嘘みたいなスポーツカーに追い抜かれ世界は
ただのまぼろしになる 長岡市 三月 とあ

三枚のおそろいシャツがペランダにはため
ていた ほんの少し前 東京 青木 公正

迷わずに揺られていた薄の穂風に従う快
楽がある 山形市 新道百合子

ゆっくりとページをめくる音のして秋の夜風
に読まれた日記 名古屋 初夏みどり

犬小屋は在りし日のまま残したり 雪の降る
夜は帰っておいで 東京 東 賢三郎

シーグラス三日月あなたの歯のかたち 欠片
ばかりを愛してしまふ 福岡市 高橋 寧

水原 紫苑 選

膨らみて膨らみて爆ぜたる宇宙あお舞ふばか
り 金色の葉が 雲南市 熱田 一俊

△評▽結句の金色の葉の唐突な感じに奇妙
な詩のリアリティがある。焼き栗のよう
にはせる宇宙よ。

吊り橋できみとゆらゆらゆらゆらしている、わたし
はたかいたころがきらい 長岡市 三月 とあ

△評▽上の句は恋の情景だが、平仮名ばか
りの下の句こそが恋を超えた魂の声である。

蛇口から滴る水がまじろみの水面に絶えずひ
るげる波紋 東京 遠野 鈴

夏風に触れてみたいと冬衣 手を伸ばしたら
光ささめく 神戸市 入間しゅか

白蟻の夜番もなくて明日には空色の壁紙を買
わされる 豊橋市 太田 貴大

鼓膜には自分の呼吸の音ばかり雪が降り積む
窓を見ながら 札幌市 橋 晃弘

ページ開きつつ伏せにすれば本のやついつま
でも主人を待つてある 甲府市 村田 一広

歩道橋歩くとききこえてふわふわする音楽のせい
じゃないと思う 横浜市 永永 キヌ

欠点の多い私たち向日葵が十月下旬も咲くよ
う生きる 千葉市 佐藤 綾子

あまやかな眠気の奥の鬼ヶ島やさしい鬼の手
しか知らない さいたま市 霧島あきら

伊藤 一彦 選

手品終えた我を園児が取り囲む魔法使いの役
降りられず 岡崎市 三上 正

△評▽読者にはユーモラスで楽しい作だ
が、作者はこのあと一体どうしただろうか。

園児らの豊かな成長を祈りたくなる歌だ。
幼き日われに夢くれた四万十の郷よ秋雨にと
つと救し 須崎市 野中 泰佑

△評▽日本最後の清流といわれる四万十
川。その川も変化しつつある救しを歌う。

病院のアンケートにも美しき文字を残せり晩
年の祖父 札幌市 住吉和歌子

落ちる夢 落ちて死んだら目が覚める 生ま
れ変わった私は起きる 那覇市 奥村 真帆

雲ひとつない空そこにびっしりと星がならん
ているはず 孤独 雲南市 熱田 一俊

すこやかに一杯だけで帰宅して文字化けのな
いわたしで眠る 長岡市 三月 とあ

私より生命力がありそうな豆苗を食べ生きて
る私 川崎市 水 面

日本の庭園の美を見直しぬ上野のモネの美術
展を観て 上尾市 清水 昇一

見渡せば監視カメラに囲まれて悲しきから
抑止力とは 東京 富見井高志

貯蓄より投資と噂され損をする被書者多き今
のマーケット 宝塚市 金子 登

米川千嘉子 選

定期券が首輪のような役割で神様と散歩をし
ている通勤 松戸市 わたなべりさ

△評▽「定期券」という首輪をつけた作者。
リードを引いているのは「神様」。「神様」
は今日も私の機嫌をうかがっている。

亡夫の名を呼ぶに理由はいらすして朝な夕な
に鳥鳴くことく 大阪市 森川 慶子

△評▽夫亡きのちの日々。昔と同じように
心は一緒にいるのだ。結句が切ない。

製品のように計測されていく派遣会社の健康
診断 碧南市 江原 冬莉

枯れた手で絆を握り直して「実家の米いる
？」と言うあなたいて 広島市 堀 眞希

怪我すれば人生一変してしまふスポーツ選手
はガラスのフィギュア 白井市 毘舎利道弘

弁当を作りて勤めに出る暮らしに憧れわれは
わが畑で食ふ 福知山市 杉森 大介

知らぬ人畑に入り来て手の掛かる夫の話をし
て出て行きぬ さいたま市 長谷川文彦

古紙回収新聞横でじっと待つ十三冊の百科大
事典 八千代市 一戸 光代

わが街の洒落たホテルの「カデンツァ」命名
したる中村絃子 和光市 中門 和子

だれにでもあるのしょうねお守りのように
きらくめく最終回が 長岡市 三月 とあ

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます